

長江上流域の綿製品流通

森 時 彦

はじめに	127
I インド綿糸の流入	128
II 新土布生産の急進と旧土布の後退	131
III 辛亥革命以降の動向	135
おわりに	141

はじめに

古来「天府の国」と称されてきた長江上流域の四川は、豊かな物産に恵まれた地域であるが、日常衣料である綿製品だけは、長江中・下流域からの供給に依拠していた。その四川にイギリスなど外国の綿工業製品が流入しはじめたのは、1860年代のことといわれる⁽¹⁾。

折からアメリカ合衆国の南北戦争（1861–1865年）がもたらした世界的な綿花飢饉を契機にして、インドでボンベイを中心に近代紡績業が勃興した。しかしその製品は10–20番手の太糸に限られていたため、中国農村における土布生産に原料綿糸を供給することで、巨大な市場を開拓することになった。インド綿糸の四川への流入は、1890年代から20世紀初にかけて急激に進み、19世紀末には、四川における綿製品のうち、ほぼ半分がインド綿糸で賄われることになった。

さらに1890年代初頭から上海あるいは武漢などに近代的な紡績工場が設立され、中国市場に機械製綿糸を供給しはじめると、四川はインド綿糸と中国綿糸の角逐の場となり、40万担前後と見込まれる規模の市場をめぐって両者は鎬を削った。上海あるいは武漢で生産される国産綿糸が、四川市場でシェアが50%を超えたのは、辛亥革命の翌年、1912

年のことである。

本稿では、辛亥革命をはさんで1890年代から1930年代にかけての四川市場が、沙市を経由地とする在来綿製品の流通市場から、インド綿糸さらに中国綿糸など、近代紡績業の製品が支配する市場に変貌していく様相を、在来綿製品の動向にも十分な注意を払いながら解明することとしたい。

I インド綿糸の流入

イギリス、インドなどの外国綿製品が大量に流入する以前、四川への綿製品供給はほとんど長江中流に位置する沙市が中継地となっていた。沙市から宜昌を経由して四川に送られる綿製品は、綿花が1885年の推計で36万担（この年は綿花が豊作で移出量も多く、平年では27万担程度であったという）、荊州土布が1896年の推計で15万担と見積もられている。余棟臣の乱などの影響で四川への移出が相当減少したと見られる1899年ですら、沙市常関を通過して四川へ送られた荊州土布は、大布、色布、小布、庄布あわせて10万2千担余り、金額は438万両余り、その翌年1900年は上半年だけで、7万6千担弱、320万両を超える金額であった（単純に2倍して通年に換算すると、15万2千担弱、640万両に達する）⁽²⁾。

このように四川の市場に外国綿製品が流入しはじめたのは、1861年に漢口、さらに1877年に宜昌と、長江中流域の河港が開港したことをきっかけとするが、本格化したのは1891年に重慶が開港して以降のことである。

従来、長江中・下流域から移入された綿花を原料として、地元の農村で織られた四川産土布や、沙市から移入される荊州土布を日常衣料としていた四川市場にまず流入してきたのは、shirtings を主とするイギリス産の高級薄地機械製綿布であったが、都市部の有閑階層が低級絹織物の代替品として着用する程度であったため、その需要は1892年の894,645疋が最多で、1疋 = 11.2ポンドで換算しても、せいぜいで7万5千担程度であった⁽³⁾。

表1は、上海に輸入された外国綿製品の中、何%が四川向けにトランジットされたかを示している。white shirtings、grey shirtings、cotton yarn と付加価値の高い順に並べてあるが、重慶開港の1891年以降は一目瞭然のように、white shirtings は5%前後、grey shirtings は10%前後、cotton yarn は25%前後で推移している。上海に輸入された外国産機械製綿糸（ほとんどはインド綿糸）の中、実に4分の1が四川向けにトランジットされたのである。

上海からトランジットされた外国産機械製綿糸、とくにインド綿糸を原料綿糸とする新

表1 上海輸入綿製品の四川向け割合

年	shirtings, white (pieces)			shirtings, grey (pieces)			cotton yarn (piculs)		
	上海輸入高	四川輸入高	%	上海輸入高	四川輸入高	%	上海輸入高	四川輸入高	%
1888	2,223,145	94,694	4	5,611,545	624,657	11	214,395	2,721	1
1889	1,542,682	75,431	5	6,087,896	530,554	9	219,187	9,728	4
1890	2,048,531	67,702	3	6,111,303	593,607	10	542,532	100,666	19
1891	1,894,235	85,943	5	5,541,843	465,662	8	642,990	102,146	16
1892	1,549,216	91,775	6	6,051,187	598,342	10	704,346	177,617	25
1893	1,296,368	63,532	5	3,903,216	423,286	11	498,012	85,618	17
1894	1,986,205	44,966	2	4,443,111	379,617	9	616,616	143,064	23
1895	1,306,754	63,547	5	4,993,324	500,345	10	572,341	140,007	24
1896	2,028,338	56,343	3	5,196,125	393,108	8	974,484	165,528	17
1897	1,641,029	54,449	3	4,473,654	464,710	10	830,952	202,268	24
1898	1,596,727	51,984	3	4,614,366	377,590	8	977,336	185,605	19

出典：Returns of Trade and Trade Reports, 1891-1899, Ichang.

土布生産が四川の農村に普及するにつれ、インド綿糸をはじめとする外国綿糸の輸入は急増した。表2に明らかなように、最初のピークは1899年、インド綿糸29万2千担弱、日本綿糸3万3千担弱など、外国綿糸の輸入合計は32万5千担余りに達し、武漢、上海などで生産された国産機械製綿糸の10万7千担を加えると、四川への機械製綿糸の供給高は、43万2千担を超えた。1900年以降、義和団事件の影響などで、四川への機械製綿糸の供給高は、いったん1901年の29万6千担にまで減少するが、1903年になるとインド綿糸が38万7千担弱のピークを刻み、四川への機械製綿糸の供給高も、45万5千担余りで、辛亥革命以前のピークを記録した。

この年、四川に輸入されたインド綿糸の総額は、14,037,065海関両にのぼり、四川の外国製品輸入総額18,073,921海関両の77.7%を占めるにいたった⁽⁴⁾。

一方、1890年に上海機器織布局が一部操業を開始して以降、四川市場には国産の機械製綿糸も参入することになる。表2のように、重慶の海関統計に国産綿糸の輸入が計上されるのは、1892年の300担が最初であるが、1896年まではきわめて緩慢な動きしかなかった。それが1897年になって、33,930担と前年の10倍近くに跳ね上がり、1898年はさらに前年比54%増の52,200担で、シェアは23%となった。1898年の重慶海関報告によれば、その内訳は上海綿糸42,100担、湖北綿糸10,100担であった⁽⁵⁾。

さらに1899年には、国産綿糸の輸入は106,975担で、シェア25%、そして1900年には

表2 重慶への機械製綿糸供給量 (単位：担)

年	種別	外国綿糸				輸入合計	国産綿糸		総計
		インド	日本	イギリス	香港		中国	%	
1891		28086.5		96		28,183			28,183
1892		128,227		618		128,845	300	0	129,145
1893		77,573		129		77,702	423	1	78,125
1894		124,599	45	474		125,118	2,139	2	127,257
1895		114,565	3	685		115,253	4,053	3	119,306
1896		166,636	6	34		166,676	3,957	2	170,633
1897		188,390	8,785	177		197,352	33,930	15	231,282
1898		160,426	9,284	324		170,034	52,200	23	222,234
1899		291,841	32,813	538		325,192	106,975	25	432,167
1900		250,347	35,464	91		285,902	136,516	32	422,418
1901		240,981	2,486			243,467	52,952	18	296,419
1902		261,833	4,550	291		266,674	74,161	22	340,835
1903		386,696	3,759	294		390,749	64,582	14	455,331
1904		336,273	18,267	78		354,618	89,914	20	444,532
1905		279,260	4,431			283,691	90,106	24	373,797
1906		376,443	8,978	201	1,047	386,669	58,828	13	446,544
1907		353,419	210	363	546	354,538	42,415	11	397,499
1908		296,497	10,396	153	18	307,064	75,913	20	382,995
1909		328,231	17,621	510	2,742	349,104	75,989	18	427,835
1910		210,330	55,605	75	825	266,835	63,184	19	330,844
1911		163,121	52,766	171		216,058	124,533	37	340,591
1912		139,078	23,711	109	4,989	167,887	174,169	51	342,056
1913		155,652	38,096	3	369	194,120	129,837	40	324,326
1914		145,320	98,350			243,670	216,395	47	460,065
1915		147,575	56,233			203,808	192,575	49	396,383
1916		122,158	20,015			142,173	194,018	58	336,191
1917		133,629	22,201			155,830	172,314	53	328,144
1918		28,509	1,994			30,503	169,795	85	200,298
1919		82,524	5,528			88,052	198,066	69	286,118
1920						70,414	168,183	70	238,597
1921						53,885	288,457	84	342,342
1922						7,834	430,674	98	438,508
1923						1,020	392,837	100	393,857
1924						2,914	320,685	99	323,599
1925						1,300	419,607	100	420,907
1926						2,226	430,653	99	432,879
1927						1,113	391,536	100	392,649
1928						824	410,685	100	411,509
1929						95	355,588	100	355,683
1930						3,552	472,860	99	476,412
1931							375,426	100	375,426

出典：1891-1919年は *Returns of Trade and Trade Reports, 1891-1919*。1920-1931年は *Foreign Trade of China, 1920-1931*。

ついに136,516担で、シェアは32%に達した。しかし国産綿糸の快進撃はここまでで、翌1901年は上海紡績業界の過剰生産による恐慌なども影響して、国産綿糸の移入は52,952担と、60%を超える大幅な落ち込みを記録した。その後は若干の増減は繰り返すものの、辛亥革命の年、1911年まで10万担を超えることは一度もなかった。

20世紀最初の10年は、インド綿糸の右肩上がりの増加に歯止めがかかり、国産綿糸の快進撃も挫折したことにより、四川市場への機械製綿糸の供給は、45万担をピークに停滞状態に陥ったのである。

II 新土布生産の急進と旧土布の後退

1890年代から1903年にかけてインド綿糸が四川の農村市場に急激に浸透した最大の原因は、折からの銀安銭高がインド綿糸の銭建て小売価格を低下させ、インド綿糸を原料とする新土布の小売価格が、長江中・下流域からの綿花を原料とする四川土布あるいは沙市から移入される荊州土布などの旧土布に比べて、圧倒的に安価になったことによる。1899年の重慶海関報告は、この年重慶での1尺当りの銭建て小売価格について見ると、荊州土布が25文、四川土布が26文であるのに対し、インド綿糸を用いた新土布は最低で16文、最高で18文であったと伝えている⁽⁶⁾。

これらの数値を基に、インド綿糸を用いた新土布の価格は輸入綿糸価格指数に、荊州土布＝旧土布の価格は輸出綿花価格指数に連動するという想定のもとに、1892-1901年の10年間について、新・旧土布の銭建て小売価格の推移を比較したのが、表3である。1899年における新土布の最低価格、16文を基準に比較すると、1892年に7.2文であった両者の差は、銀安銭高の進行とともに開きだして、ピークの1897年には10.8文にまで50%も拡大し、さらに輸出綿花価格の急騰も加わった1901年には、13.4文と1892年の2倍近くにまで拡大した。旧土布は価格の点で、まったく新土布に対抗できなかったのである。事実、先述の1899年の重慶海関報告は、「沙市から瀘州、叙州府、嘉定府への厘金局通過の民船(Likin junks)による土布(Nankeens)の到来は減少しつづけている」と指摘している。

表3の推計が実勢にかなり近いものであることは、表4-1・4-2の計算からも追認することができる。表4-1には、1897年の重慶における旧土布2種と新土布の価格が、1疋当りシリング・ペンスで示されている。これを銭建て価格に換算すると、荊州土布が2,300文、インド綿糸の新土布が1,394文に相当する。新土布価格を100とすると、荊州土布の指数は165となる。

表4-2には、荊州土布は輸出綿花価格指数に、新土布は輸入綿糸価格指数に連動すると

表3 輸入綿糸・輸出綿花の銭建て価格と新・旧土布の価格推計

項目 年	銀銭比 価1海 関両当 り文	輸入綿糸価格と新土布価格					輸出綿花価格と旧土布価格			
		輸入綿糸価格			新土布 (1尺当り)		輸出綿花価格			旧土布
		担当 り海 関両	斤当 り文	1899 = 100	16文	18文	担当 り海 関両	斤当 り文	1899 = 100	1尺当 り文
1892	1,704	16.92	288.3	109.3	17.5	19.7	10.00	170.4	98.8	24.7
1893	1,690	18.12	306.2	116.1	18.6	20.9	10.70	180.8	104.9	26.2
1894	1,613	18.37	296.3	112.4	18.0	20.2	9.85	158.9	92.2	23.0
1895	1,510	18.64	281.5	106.7	17.1	19.2	12.50	188.8	109.5	27.4
1896	1,342	19.64	263.6	100.0	16.0	18.0	12.00	161.0	93.4	23.4
1897	1,263	21.82	275.6	104.5	16.7	18.8	14.99	189.3	109.8	27.5
1898	1,342	19.94	267.6	101.5	16.2	18.3	11.51	154.5	89.6	22.4
1899	1,326	19.89	263.7	100.0	16.0	18.0	13.00	172.4	100.0	25.0
1900	1,316	20.14	265.0	100.5	16.1	18.1	13.85	182.3	105.7	26.4
1901	1,277	21.42	273.5	103.7	16.6	18.7	16.18	206.6	119.8	30.0

出典：銀銭比価は *Decennial Reports 1892-1901*。輸入綿糸価格と輸出綿花価格は楊端六・侯厚培等編『六十五年来中国国際貿易統計』国立中央研究院社会科学研究所、1931年、36、46頁。1899年の新・旧土布価格は *Returns of Trade and Trade Reports, 1899, Chungking*。

表4-1 1897年重慶における3種土布の価格比較

種別	価格	文	s. d.	指数
湖北荊州布 1.5 feet × 30 feet		2,300	5s. 6d.	165
四川綿花旧土布 1.5 feet × 30 feet		1,812	4s. 4d.	130
印度綿糸新土布 1.5 feet × 30 feet		1,394	3s. 4d.	100

出典：周勇・劉景修訳編『近代重慶経済と社会発展 1876-1949』四川大学出版社、1987年、253頁。

表4-2 1897、1899年重慶における2種土布の価格比較

種別	年	1899年		1897年	
		文	指数	文	指数
湖北荊州土布 1尺	max	25	139	28	146
	min	25	156	28	165
輸入綿花旧土布 1尺	max	26			
	min	26			
インド綿糸新土布 1尺	max	18	100	18.8	100
	min	16	100	16.7	100

出典：森時彦『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会、2001年、28-31頁。

の想定で、1899年の既定数値を基に、1897年の指数を算出したものである。1899年の最低価格16文を基準にすると、1897年の荊州土布の指数は、ちょうど165となり、表4-1の実数と完全に一致する。1892-1901年10年間の新・旧土布価格の推移は、ほぼ表3のデータに沿っていたと考えてよいだろう。

新土布生産は、その圧倒的なコストパフォーマンスを背景に、1890年代から20世紀初にかけて急速に四川農村に浸透し、原料であるインド綿糸など機械製綿糸の流入も、1903年に辛亥革命以前のピークである45万5千担強を記録したのである。その分、長江中・下流域からの綿花を原料とする四川土布、沙市から移入される荊州土布は、四川市場から後退することになった。

しかし新土布生産の躍進も、ほぼ1903年をピークに停滞あるいは後退の局面を迎えることになった。表2で見たように、2年後の1905年には、インド綿糸の輸入は279,260担と、10万担以上減少し、機械製綿糸の供給高も373,797担と、8万担以上減少した。その後辛亥革命までは、四川への機械製綿糸の供給高は、最高が1906年の446,544担、最低が1910年の330,844担であった。1903年以降、機械製綿糸の供給高は33万担から45万担の前後で停滞あるいは後退していたのである。

その原因はすでに指摘したことがあるように、インド綿糸の銭建て小売価格を急速に低下させた銀高銭安傾向が、1903年辺りを境に一転して銀高銭安傾向に反転し、今度は逆にインド綿糸の銭建て小売価格を急激に上昇させ、新土布の価格競争力を低下させることになったのである⁽⁷⁾。重慶の銀銭比価データは、1901-1911年の分を欠くので、重慶と強い交易関係で結ばれていた沙市のそれについて見ると、1903年に1海関両当り1,170文まで進んだ銭高は、翌年から銭安に一転し、1905年1,420文、1908年1,790文と下落して、1909年にはついに1,950文に達し、わずか6年間で67%も下落したのである⁽⁸⁾。

1909年の重慶海関報告は、四川の綿糸・綿製品の取引が、この年後半の銀高銭安によって非常な逆風を受けていることを指摘した上で、「供給される綿製品を銀で支払い、銭で小売している商店主は、どの取引でも自分に不利な条件に直面し、そしてたとえ小売価格がいささか上昇を見たところで、やはり残る損失は、輸入業者が経費の節減によって一部負担することを強いられたのである」⁽⁹⁾と、銀高銭安によってもたらされた綿糸・綿製品の銭建て価格の上昇を、全面的に消費者に転嫁することができない取引業者が、経営の合理化で吸収しようとしている様子を伝えている。

一方、新土布の躍進によって四川市場から駆逐されつつあったかに見えた荊州土布や四川土布などの旧土布は、銀高銭安の局面を迎えて蘇生の機会をえた。表5-1は、宜昌常関を通過して四川に移入された荊州土布と長江中・下流域の綿花のデータである。金額まで

捕捉できるデータは、1904-1907年の4年分しかない。これによると、1905年に9,932担まで減少した荊州土布の通過量は、1907年には46,188担に増加し、最盛時における15万担のほぼ3分の1程度になった。

さらに後出の表8によると、民国元（1912）年には121,535担を数え、最盛時の8割にまで回復した。

長江中・下流域からの綿花は、すでに1904年に1890年代以前の平年量（27万担）に迫り、1907年を除いて高水準を維持していた。金額も300万海関両をはるかに超え、荊州土布と合計すると、500万海関両に迫るものであった。

宜昌常関を通過して四川に遡上する綿製品に対して、四川から下っていく大宗の商品であった井塩と阿片の通過量を記録しているのが、表5-2である。細かい事はさて置き、三峡を下った100万担近くの井塩は、487-628万海関両の金額となり、三峡を遡上してくる綿製品の金額415-483万海関両を賄って余りある状態であった。さらに加えて2-3万担の阿片が、872-1,234万海関両に上る巨額の商品として三峡を下っていった。

その結果、常関経由の井塩・阿片の移出額が1,410-1,770万海関両にも上ったのに対し、綿製品の移入額は500万海関両を超えることはなかった。常関経由の貿易では四川の方が、おおよそ1,000-1,300万海関両の移出超過状態にあったわけである。

上述のような常関経由の移出超過状態を、表6の重慶海関経由の貿易額統計と比較すれ

表5-1 宜昌常関通過綿製品

種別 年	Cotton Cloth			Cotton Raw			Cotton Yarn			Cotton Total	
	Piculs	Hk. Tls	per	Piculs	Hk. Tls	per	Piculs	Hk. Tls	per	Piculs	Hk. Tls
1904	38,750	1,602,750	41.36	253,750	3,229,750	12.73				292,500	4,832,500
1905	9,932	397,000	39.97	259,004	3,756,000	14.50				268,936	4,153,000
1906	25,860	930,960	36.00	267,334	3,730,509	13.95				293,194	4,661,469
1907	46,188	1,939,896	42.00	162,851	2,198,489	13.50	16,812	521,127	31.00	225,851	4,659,512

表5-2 宜昌常関通過井塩・阿片

種別 年	Salt			Opium			Total	
	Piculs	Hk. Tls	per	Piculs	Hk. Tls	per	Piculs	Hk. Tls
1904	971,250	4,875,000	5.02	23,957	9,394,000	392.12		14,269,000
1905	897,493	5,385,000	6.00	22,563	8,724,503	386.67		14,109,503
1906	967,404	6,288,126	6.50	25,304	9,473,945	374.41		15,762,071
1907	815,092	5,379,607	6.60	29,630	12,345,900	416.67		17,725,507

出典：Returns of Trade and Trade Reports, 1907, Ichang.

表6 重慶輸入超過額 (単位：海関両)

年	imports (A)		exports (B)	A-B
	foreign goods	native produce		
1904	14,689,635	3,764,764	10,952,028	7,502,371
1905	11,554,982	5,007,389	11,169,256	5,393,115
1906	14,819,720	3,284,360	10,892,126	7,211,954
1907	13,322,204	2,643,764	11,079,936	4,886,032

出典：Returns of Trade and Trade Reports, 1904-1907, Chungking.

ば、20世紀初の四川の貿易構造をおおまかに把握することが出来る。

既述のように1903年、四川輸入総額の77.7%を占めたインド綿糸は、翌1904年は8,993,705海関両にまで減少した。その結果、四川輸入総額14,689,635海関両に占める割合は、61.2%に低下した。表6のように、1904-1907年の4年間に、インド綿糸を大宗とする外国製品と国内産品をあわせた輸入総額は、1,596-1,845万海関両であったのに対し、輸出総額は1,089-1,116万海関両にとどまった。そのため海関経由の貿易では、488-750万海関両の輸入超過状態にあったのである。

しかしこの輸入超過額を先の常関経由の移出超過額1,000-1,300万海関両と対比すると、全体として四川は500万海関両程度の輸・移出超過であったと判断できる。個々の大宗商品でいえば、自貢一帯で生産される井塩が、沙市から移入される綿花、土布を上回る金額に上り、「土葉」と称される四川、雲南産の阿片が、インド綿糸を中心とする外国綿製品の代金を賄って余りある商品だったのである。

辛亥革命以前の四川市場は、1890年代から1903年にかけてのインド綿糸の大量流入と上海などの国産綿糸の躍進で、近代綿工業製品が60万担前後と見込まれる市場規模のほぼ3分の2を占めるまでになったが、荊州土布や四川土布など由来綿製品がなお3分の1前後を維持していたのである。

III 辛亥革命以降の動向

辛亥革命を経た四川市場では、表2に戻ってみると、1912年は外国綿糸が前年の216,058担から5万担近く減らして、167,887担となったのに対し、国産綿糸は前年の124,533担から逆に5万担近く増加して空前の174,169担に達し、シェアも51%と初めて半分を超えた。その後は、第一次世界大戦の勃発まで日本綿糸の急増で外国綿糸が1912年比45%程度増加したため、国産綿糸のシェアはいったん50%を切る。

その後国産綿糸は、1914年に216,395担のピークをきわめるが、翌1915年からは軍閥混戦の影響もあって、1919年の169,795担まで20%以上の減少を余儀なくされた。しかし外国綿糸は、第一次世界大戦の勃発、それに続く21カ条要求反対運動の日本製品ボイコットなど、さまざまな要因がかさなって、1915年以降国産綿糸を上回る急速な減少にみまわれた。その結果、第一次世界大戦終結の年、1918年には国産綿糸のシェアは85%にまで高まった。

1915年の重慶海関報告は、インド綿糸激減の原因について、「業者の言に拠れば、国産綿糸に圧倒されたためであり、数年ならずの間にインド綿糸はほとんど跡形なく消滅するであろうとのことである（拋業斯者之言、為土棉紗所抵制、不数年間印度棉紗、殆無踪跡）」と予言している。さらに1919年の重慶海関報告では、「インド綿糸は近年輸入が頗る稀で、今では重慶での競争の物品となっている（印度棉紗、近年進口頗希、現又成為渝市競争之物品）」⁽¹⁰⁾と、1915年の予言が荒唐無稽でなかったことを裏付けている。国産綿糸による外国綿糸の圧倒は、第一次世界大戦期から顕在化し、1920年代に入って決定的となったのである。

表7 万県への機械製綿糸の供給量（単位：担）

種別 年	外国綿糸					国産綿糸		総計
	インド	日本	イギリス	香港	小計	中国	%	
1917	5,825	1,734			7,559	2,590	26	10,149
1918	8,236	2,107			10,343	38,405	79	48,748
1919	3,251	1,678			4,929	32,757	87	37,686
1920					1,937	18,905	91	20,842
1921					3,474	39,541	92	43,015
1922					1,012	66,803	99	67,815
1923					72	56,760	100	56,832
1924					845	65,945	99	66,790
1925					1,276	90,721	99	91,997
1926					157	61,938	100	62,095
1927					339	65,161	99	65,500
1928					319	78,015	100	78,334
1929						97,052	100	97,052
1930						100,256	100	100,256
1931						63,253	100	63,253

出典：1917-1919年は *Returns of Trade and Trade Reports, 1917-1919*, Wanh sien、1920-1931年は *Foreign Trade of China, 1920-1931*, Cotton Yarn。

1917年からは、万県海関經由分が別に記載されるようになった。表7は、1917-1931年15年間にわたる万県經由の機械製綿糸供給量を示している。万県經由の国産綿糸は、初年度の1917年こそ2,590担で、シェアも26%と非常に低かったが、翌1918年からは急増した。1918年の万県海関報告は、「国内品の移入では、国産綿糸が大いに増加した（土貨進口、土棉紗大為加増）」と指摘し、国産綿糸38,405担の移入金額は、国内品移入総額2,117,640海関両の96.85%を占めると強調した上で、その原因を川東・川北一帯の販売が旺盛であった点に求め、「蓋し重慶の川東・川北の綿糸取引は、すでに万県に移りつつあるのだ（蓋重慶之川東川北棉紗貿易、已漸趨於万邑矣）」⁽¹¹⁾と結論付けている。綿糸取引の万県移行については、表7を見る限り、1920年代に持ち越されたと考える方がよさそうであるが、万県經由の国産綿糸のシェアについては、表2のデータに近い、あるいはそれより高いパーセンテージを維持している。

表8は、表2のデータに万県海関經由分を加えて、四川全体に供給された機械製綿糸の総量を算出するとともに、1905-1919年15年間における宜昌常関經由の綿花、土布移入量を表示している。

国産綿糸のシェアについては、万県海関經由分を加えても、ほとんど変化はなく、1920年代に入って急上昇し、旅大回収運動の日本製品ボイコットがおこった1923年には、ほぼ100%に達し、その後も99%以下に下がることはなかった。全国的に綿糸の国産化率が100%を超えたのは、1927年のことであるから、四川は地元には紡績工場はなかったものの、全国に先駆けて国産綿糸100%の市場になったのである。1920年代は、四川市場からインド綿糸をはじめとする外国綿糸がほぼ完全に駆逐された時期であった。

一方、宜昌常関經由の綿花、土布移入量に目を移すと、辛亥革命から第一次世界大戦前半期にかけて、インド綿糸大量流入以前の水準に近い状態に戻っていることを見て取れる。土布については、既述のように、1912年の12万担余りの移入は最盛時の8割に当る。綿花については、データの連続性が保証できないため、蓋然的な指摘に止めざるをえないが、1914年の48万2000担余りをピークとする第一次世界大戦前半期までのボリュームは、やはり注目に値する。

1917年の重慶海関報告は、「ただ農耕の重労働に従事する者は、つねに湖北綿花や四川綿花を紡いだ土糸で織り上げた土布あるいは湖北土布を購入する。品物は粗末ではあるが、年がら年中着用しても何年ももつのに加え、価格も安いので、見捨てられず愛用されるわけである（但務農負苦者、恒購鄂棉川棉紡紗績成之布、或鄂布、雖其貨粗松、時常服用而可延至数年、兼之価亦低賤、遂樂用之而不為嫌弃也）」⁽¹²⁾と述べている。かつて1901年の四川では、インド綿糸で織った新土布が1尺当り16.6文で、沙市から移入される荊州土布

表8 1891-1931年四川への綿製品供給量

種別 年	外国綿糸 (担)	国産綿糸 (担)	国産化率 (%)	小計 (担)	宜昌常関 通過綿花	宜昌常関 通過土布	総計 (担)
1891	28,183	0	0	28,183			
1892	128,845	300	0	129,145			
1893	77,702	423	1	78,125			
1894	125,118	2,139	2	127,257			
1895	115,253	4,053	3	119,306			
1896	166,676	3,957	2	170,633			
1897	197,352	33,930	15	231,282			
1898	170,034	52,200	23	222,234			
1899	325,192	106,975	25	432,167			
1900	285,902	136,516	32	422,418			
1901	243,467	52,952	18	296,419			
1902	266,674	74,161	22	340,835			
1903	390,749	64,582	14	455,331			
1904	354,618	89,914	20	444,532	253,750	38,750	737,032
1905	283,691	90,106	24	373,797	259,004	9,932	642,733
1906	386,669	58,828	13	445,497	267,334	25,860	738,691
1907	354,538	42,415	11	396,953	179,663	46,188	622,804
1908	307,064	75,913	20	382,977	179,907	41,203	604,087
1909	349,104	75,989	18	425,093	175,780	39,949	640,822
1910	266,835	63,184	19	330,019	105,369	31,102	466,490
1911	216,058	124,533	37	340,591	78,755	30,714	450,060
1912	167,887	174,169	51	342,056	325,253	121,535	788,844
1913	194,120	129,837	40	323,957	363,720	102,768	790,445
1914	243,670	216,395	47	460,065	482,332	86,810	1,029,207
1915	203,808	192,575	49	396,383	406,488	76,467	879,338
1916	142,173	194,018	58	336,191	327,389	86,501	750,081
1917	163,389	174,904	52	338,293	146,633	54,571	539,497
1918	40,846	208,200	84	249,046	37,374	26,010	312,430
1919	92,981	230,823	71	323,804	86,330	46,665	456,799
1920	72,351	187,088	72	259,439			
1921	57,359	327,998	85	385,357			
1922	8,846	497,477	98	506,323			
1923	1,092	449,597	100	450,689			

長江上流域の綿製品流通

1924	3,759	386,630	99	390,389			
1925	2,576	510,328	99	512,904			
1926	2,383	492,591	100	494,974			
1927	1,452	456,697	100	458,149			
1928	1,143	488,700	100	489,843			
1929	95	452,640	100	452,735			
1930	3,552	573,116	99	576,668			
1931	0	438,679	100	438,679			

出典：Returns of Trade and Trade Reports, 1891-1919; Foreign Trade of China 1920-1931.

注：綿花・土布は、1911年までは旧暦。綿花の記載には、混乱が見られる。1911年版では、Cotton, Rawと記録されていた71,141担が、1915年版では帯子綿花 Cotton with Seedとされ、また1911年版で Cotton Yarnと記録されていた7,614担が、1915年版で綿花 Cotton Rawとされている。1915年版では、1911-1914年の4年間だけ、綿花と帯子綿花に区分しているが、それ以降は綿花に一本化している。また1911年版以前では、1907-1911年の5年間は、Cotton Rawと Cotton Yarnに区分してデータが記録されている。以上のような事情から、Cotton Raw, Cotton with Seed, Cotton Yarnの区別が困難であるので、本表では3者の合計を綿花としておく。特に Cotton Rawと Cotton with Seedは1対2.5程度の換算率で調整する必要があるが、一律に合算した。したがって、1904-1906年、1907-1911年、1912-1919年のデータは不連続であることを銘記する必要がある。なお綿花については、紡績用だけでなく、中入綿など他の用途があることも注意に値する。

(鄂布)の30文と比べると半値に近い安価な商品であったが、1917年の四川では、四川土布や荊州土布といった旧土布の方がむしろ安価だったのである。

しかし第一次世界大戦後半期に入ると、綿花、土布ともに軍閥混戦の四川への移入は一落千丈で減少した。1918年、綿花の移入は3万7千担余にまで減少し、1914年の13分の1に激減した。土布の移入も1918年は2万6千担にすぎず、1912年の5分の1近くにまで減少した。綿花、土布ともに1919年は、五四運動の国貨提唱などの影響もあるのか、2倍以上あるいは2倍近くに増加しているが、それ以降の動向については、1920年代のデータを欠いているので、遺憾ながらいまのところその分析を断念せざるをえない。

一方機械製綿糸については、1920年代とくに1923年以降、四川市場は国産綿糸がほぼ100%シェアを占めることになり、さらに1930年にはその供給量は57万3千担を超え、四川における綿製品のほとんどを一手に賄う存在になったことが確認される。

では国産綿糸がその大部分を占めることになった四川市場は、どのような市場構造であったのであろうか。表9は、1934年6月に調査された機械製綿糸の番手別供給量である(データは1933年のものと思われる)。1梱=3担として、総供給量は101,780梱×3=305,340担となる。調査報告者は、1933年海関統計の輸入総量503,660担よりかなり少ない点は指摘しているが、その理由については言及していない⁽¹³⁾。いずれにしても、1930年に比べて落ち込んだのは、1933年が農村恐慌の最悪期で、農村織布業の原料綿糸に用い

表9 1933年四川への機械製綿糸番手別供給量 (単位：梱)

地域	工場	6	10	16	20	32	40	42	60	80	計	平均
上海	永安		2,000	1,800	6,700	3,000		350	16	4	13,870	21.3
	申新	50	750	100	5,300	1,650	30	200			8,080	22.0
	溥益				1,000						1,000	20.0
	大豊			4,000	1,000						5,000	16.8
	緯通				1,500						1,500	20.0
	怡和				10,000						10,000	20.0
	上海計	50	2,750	5,900	25,500	4,650	30	550	16	4	39,450	20.4
江蘇	振新		500	1,500	3,000	500					5,500	19.1
	大生		3,500	1,500	10,500						15,500	17.4
	蘇綸				1,000	2,000					3,000	28.0
	広勤				1,000						1,000	20.0
	大通				1,500						1,500	20.0
	江蘇計		4,000	3,000	17,000	2,500					26,500	19.2
湖北	裕華		11,000	2,000	5,000	800					18,800	14.2
	漢口第一		9,000	500	3,500	500		100			13,600	13.5
	沙市		50	635	1,245						1,930	18.4
	湖北計		20,050	3,135	9,745	1,300		100			34,330	14.2
山東	華興					1,500					1,500	32.0
	山東計					1,500					1,500	32.0
総計		50	26,800	12,035	52,245	9,950	30	650	16	4	101,780	18.2

出典：「四川之棉紗業」『四川月報』5巻1号、1934年7月、18-22頁。

られる太糸の需要が大きく減退したことも一因であろう。

この年、四川市場に機械製綿糸を供給したのは、上海、江蘇、湖北、山東の15工場である。唯一イギリス資本の怡和を除いて、他はすべて中国資本である。調査報告者は、「日本綿糸〔在華紡綿糸であろう〕は、何度か商人がラベルを張り替えて密輸しようとしたが、さまざまな方面から反対されて思い止まった（東洋紗雖迭有商人欲謀改牌私運、終受各方反対而止）」と伝えている。

供給量で見ると、上海の6工場が39,450梱、湖北の3工場が34,330梱、江蘇の5工場が26,500梱、山東の1工場が1,500梱であった。工場別で1万梱以上は、湖北の裕華が18,800梱、江蘇の大生が15,500梱、上海の永安が13,840梱、湖北の漢口が13,600梱、上海の怡和が1万梱であった。また番手別では、20番手が52,245梱、10番手が26,800梱、16番手が12,035梱、32番手が9,950梱であった。32番手がややまとまった量になっているものの、

表10 3省への機械製綿糸番手別供給量

省	14番手以下		16番手		20番手		20番手超過		総計 (梱)
	梱	%	梱	%	梱	%	梱	%	
山東	3,585	1.9	74,463.5	39.3	56,063.5	29.6	55,359	29.2	189,471
湖南	6,866.5	9.1	29,933.5	39.5	27,486.5	36.2	11,574.5	15.3	75,861
四川	26,850	26.4	12,035	11.8	52,245	51.3	10,650	10.5	101,780

出典：山東は『山東紡績業の概況』（北支経済資料12輯）南満洲鉄道天津事務所、1936年。湖南は孟学思編『湖南之棉花及棉紗』湖南省経済調査所、1935年。四川は「四川之棉紗業」『四川月報』5巻1号、1934年7月、18-22頁。

大勢としては10-20番手の太糸市場であった。

平均番手をみても、その傾向ははっきり確認できる。筆者は、旧來の手織機で10-20番手の太糸を原料綿糸として新土布を生産する織布業を在来セクター、足踏織機（鉄輪機）や力織機で40番手前後の細糸を原料綿糸として改良土布などを生産する織布業を近代セクターと措定し、その境界線を20番手に置いている⁽¹⁴⁾。四川全体の平均番手、18.2番手は、四川の織布業が、新土布生産を主体とする在来セクター優勢の段階であったことを反映していると考えられる。供給サイドの平均番手をみると、湖北の3工場の平均が14.2番手で、在来セクター向けの傾向がもっとも顕著であるのに対して、上海の6工場の平均は20.2番手で、在来セクターと近代セクターの境界をわずかながら超えている。とくに永安と申新は、32番手以上をややまとまった量供給している。山東の1工場も32番手に特化している。

1933年の四川市場は、近代セクター向けの20番手超過の細糸が10%程度供給されていたが、90%程度は在来セクター向けの10-20番手の太糸が占めていたのである。これを沿海の山東、長江中流の湖南と比較したのが、表10である。山東は、20番手超過の細糸が29.2%と3分の1近くを占め、湖南でも、20番手超過の細糸が15.3%で、四川を5ポイント近く上回っている。

1920年代、上海を頂点とする沿海地域では、近代セクターの織布業が急速に成長し、20番手超過の細糸に対する需要が急増していた⁽¹⁵⁾。しかし四川では、近代セクターの成長は微弱で、近代セクター向けの20番手超過細糸に対する需要の割合は、山東の3分の1、湖南の3分の2程度にすぎなかったのである。

おわりに

以上の考察をまとめると、1890年代から1930年代にかけての四川における綿製品の流通状況は、大きく3つの時期に区分することができるであろう。

第1の時期は、1890年代から1903年までの時期である。インド綿糸をはじめとする機械製綿糸の供給が銀安銭高を背景に急増して、1903年に45万担を超え、四川における綿製品需要の3分の2を占めるに至った。しかし、1903年以降の銀高銭安傾向への反転は、外国綿糸の輸入にブレーキをかけ、機械製綿糸の供給量は40万担前後で停滞することになった。

第2の時期は、1903年から1923年までである。この間、機械製綿糸の供給量は停滞的で、とくに1918年から1920年までの3年間は、20万担台にまで激減したが、上海、江蘇、湖北などから移入される国産綿糸は、辛亥革命以降飛躍的に増加し、1923年には国産綿糸のシェアがほぼ100%を達成した。

そして第3の時期は、1923年から1930年代にかけての時期となる。外国綿糸がほぼ駆逐された四川市場では、国産の機械製綿糸が一進一退を繰り返しながらも、次第に荊州土布や四川土布などの旧土布から市場を奪い、1930年には57万6千担余りのピークを迎えて、四川における綿製品の需要をほぼ賄うまでにいたった。しかしこの時期、上海を頂点とする沿海地方では、近代セクターの織布業が急成長し、20番手超過の細糸に対する需要が急増していたが、四川では近代セクターの成長は微弱で、20番手超過の細糸に対する需要はごく少量であった。

註

- (1) 張学君、張莉紅『四川近代工業史』四川人民出版社、1990年、39頁に引用された民国『涪陵県統修涪州志』巻18の記載によると、機械製綿糸・綿布が四川に流入するのは概ね1860年代の同治年間である。
- (2) 森時彦『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会、2001年、71-74頁。
- (3) 同前66-67頁。
- (4) *Returns of Trade and Trade Reports, 1903, Chungking.*
- (5) *Returns of Trade and Trade Reports, 1898, Chungking.*
- (6) *Returns of Trade and Trade Reports, 1899, Chungking.*
- (7) 前掲拙著『中国近代綿業史の研究』28-29頁。
- (8) 同前22頁。
- (9) *Returns of Trade and Trade Reports, 1909, Chungking.*
- (10) *Returns of Trade and Trade Reports, 1915; 1919, Chungking.*
- (11) *Returns of Trade and Trade Reports, 1918, Wanh sien.*
- (12) *Returns of Trade and Trade Reports, 1917, Chungking.*
- (13) 「四川之棉紗業」『四川月報』第5巻第1号、1934年7月、22頁。
- (14) 前掲拙著『中国近代綿業史の研究』303-311頁。
- (15) 同前323-328頁。